

〔日本の陶磁展によせて〕

## 館藏品紹介

### 中国青花を手本とした染付磁器二作品について

染付山水文大皿（有田 初期伊万里、江戸時代、重要文化財、大和文華館蔵：図1、2）は直径45.4cm、高さ12.5cmの大皿で、側面から見ると半球状の深い鉢形をしています。口縁部直下では垂直に立ち上がり、縁は鐔状に広がっています。高台は口縁の大きさに比べて直径13cmと小さい造りですが、高さが極端に低く、全体としては安定感があります。器胎は厚く、重量感のある見た目の通りに重い手取りをしています。表面にはコバルト顔料を用いた染付の技法で文様が描かれ、やや青味を帯びた透明釉が全体に掛けられています。器形も文様の描写も堂々とした作行きで、17世紀前半までの染付磁器である初期伊万里の代表作として日本陶磁史の中でも重要な位置にある作品といえます。

日本での磁器の焼成は、17世紀の初めに現在の佐賀県有田で始められました。主に伊万里港より出荷されたため、伊万里焼と称されています。朝鮮半島から渡来した陶工の李參平が磁土を発見したと伝えられていますが、磁器の焼成には朝鮮半島からの陶工の他に、中国の明時代末から清時代初めにかけて景德鎮民窯で制作された古染付が大きな影響を与えていることが明らかにされています。古染付は、

日本に多く輸入され、日本からの注文制作も行われていた染付（中国では「青花」と称します）磁器です。

この大皿はコバルトによる藍に近い青色が部分的にややくすんでいますが、発色は良く、潤いのある色合いをしています。器形に従って屈曲部などで区画され、それぞれに文様が描かれています。大きく湾曲した見込には山水図が描かれ、周囲に鐔縁も含めて二重の文様帯が囲みます。これは点文を伴う線状唐草文（鐔縁）とパルメット状の文様を連ねたもの（口縁部直下）で、ともに曲線を巡らせる連続文様が描かれています（図2）。山水図には画面の手前及び左右に岸や高くそびえる岩山、半円形が連なる塔のような建造物、梅と見られる樹木が描かれ、その他に遠山や帆船の進む様子、雲などが見られます。切り立った岩山などは古染付にも見られる中国風の風景です。しかし樹木は歪みが強調され、特に画面の端では岩山が器形に合わせて湾曲しているため、凸レンズを通して風景を見ているように感じられます。山の下線と地面が平行ではなく水平線の設定にくい奇怪ともとれる表現で、これは半球状の器形によって生じている構図と考えられますが、画面に奥行きや立体感を与える視覚的な効果が現れ取れます。

山水図は不安定に歪められているのではなく、画面上方で横に連なる二つの山々の交点とすぐ下の山々の頂を通る直線が画面の中心線となると見られます。上部の山々はやや傾いていますが、左右に岩のそびえる岸を配した安定した構図となります。鐔縁に描かれた連続文様には花文がほぼ等間隔に九箇所配され、連山の上部に位置する一つが頂点となるため、縁文様と見込みの文様は関連しています。

更に、点する山々や帆船、雲はこの中央線に沿って位置しながら、同時に、交互に反対の方向に斜めに傾く、すなわちジグザグの方向性を持って描かれています。これらのモチーフは左右の岩山やそこから伸びている樹木の間をぬって配され、モチーフ同士が重ならないように考慮されていることもうかがえます。上方へと伸びる岩山の直線的な方向性に対して、中央モチーフの持つジグザグの構成は岩の向こうに広がる空間の横の広がりや示唆しています。奥に広がる深遠な風景を見る側に様々に想像させてくれる画面構成といえます。

絵付けの筆線は岩肌や山肌にはコバルトを薄く塗り重ね、輪郭や細部には濃い線が引かれます。勢いのある伸びやかな筆使いです。また、山際や樹木に沿って点描を添えたり、岩肌に短い線を掃くように用いて調子を出すといった丁寧な描写も見られます。

このように、細部まで考慮された力強い作風からは、自由で大らかな気風が感じられ、また、磁器制作初

期の工人の意気込みが伝わってきます。

染付山水文大皿などの初期伊万里が手本としたと考えられる古染付にやや遅れて、中国の民窯では、日本で祥瑞と称される染付磁器（図3：青花刻花文字文碗 祥瑞 大和文華館蔵）が焼成されます。祥瑞は古染付よりも丁寧な作りで、コバルトの発色も艶やかになります。また、幾何学文様帯が取り入れられるなど、文様構成にデザイン性が感じられる作品が多く見られます。祥瑞も古染付と同様に日本で愛好され、永楽保全など祥瑞を手本とした陶工もまた見受けられます。

そのような作品の一つに、鹿背山焼／染付花鳥山水文水指（図4：江戸時代末期、大和文華館蔵）が挙げられます。中川利三郎（文政六年～大正元年：1823～1912年）の作になります。底部に向かってやや広がる竹を象った器形で、表面を3段に区画して染付で文様を施しています。最下段には「寿」「福」字を円文に交互に書き入れ、口縁部には波濤文を配します。これらの間は節を境界に2段に分け、上段に花鳥図、下段に山水図を描いています。山水図も花鳥図も横につながり、画面に描かれますが、6場面に細かく分けられ、小画面の連続で構成されています。

水指の下部に向かうに従って節の幅が短くなり、また、最下部のやや広がる部分に円文を並べた造形は、竹の根元に近い箇所を吉祥用いてあらわしているところ遊び心が感じられます。（瀧朝子）

図1.染付山水文大皿 江戸時代



図2.部分図

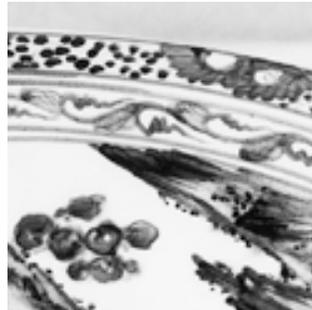


図3.青花刻花文字文碗 中国・明時代



図4.染付花鳥山水文水指 江戸時代



季刊 美のたより No.147

平成16年 7月 2日

発行 大和文華館